フッサールの形相的心理学(1911～1917)の展開

堀　栄造

序言

フッサール現象学において独特の意義を担う形相的心理学は、どのような構想および企図の下に生成するのか。そして、形相的心理学は、フッサール現象学の体系の中でどのように位置づけられるのか。また、形相的心理学は、どのように遂行されるのか。さらに、形相的心理学は、フッサール現象学全体の中でどのように構造化され、どのような領域を成すのか。

本論は、上述のような課題を解決するために、１９１１年７月５／６日付けのフッサールのディルタイ宛ての書簡、１９１３年公刊の『イデーンⅠ』、１９１２年から１９１５年へかけて執筆された『イデーンⅡ』、１９１７年のフッサールの二つの論文「現象学と心理学」および「現象学と認識論」に基づいて、１９１１年時点から１９１７年時点までのフッサールの形相的心理学の展開について究明する。

(1)１９１１年時点の現象学による諸科学の基礎づけの構想

フッサールは、１９１１年７月５／６日付けのディルタイ宛ての書簡の中で、次のように述べている。「例えば、物理的自然についての科学や人間的精神についての科学等々のあらゆる現存に関する科学［Daseinswissenschaft］は、現象学的〈構成的〉本質論に関係づけられ、その源泉から究極的意味説明を、それゆえその真理内実の究極的規定を被るやいなや、おのずから（私の概念に従えば）《形而上学》へ変わります」(1)。ここで、フッサールは、自然科学や精神科学等々の諸科学は現象学によって基礎づけられ、その際に諸科学は現象学から見れば形而上学つまり存在論となることを説いている。

そして、フッサールは、さらに次のように述べている。「近代の偉大な業績のうちに生じた自然科学および精神科学に対して、こうした意味での形而上学が要求されたということは、認識の本質において或る層状化およびそれと連関して或る二重の認識態度が基礎づけられるという点にその源泉をもっています。つまり、一方では、意識的に思念され、かくかくに思惟されて現出的に与えられる存在に純粋に向けられるということであり、他方では、しかし、存在と意識との間の不可解な本質関係に向けられるということであります。一切の自然的現存認識は、つまり、前者の態度の内での一切の認識は、究極的に妥当するような存在の究極的意味規定と《自然的》態度で憶測されてすでに到達された真理の究極的評価がその解明に依拠するような諸問題の次元を、未解決のままに残しているのです」(2)。ここで言われている「或る層状化」とは、意識対象としての存在について問う存在論的次元の層とその基底としての存在と意識の相関を問う現象学的次元の層の層状化のことである。また、ここで言われている「或る二重の認識態度」とは、自然的現存について認識しようとする存在論的認識態度としての自然的態度と自然的現存認識を基礎づけようとする現象学的認識態度としての現象学的態度のことである。

したがって、１９１１年時点のフッサールは、自然科学や精神科学等々の諸科学を現象学によって基礎づけるという構想を抱いており、諸科学の存立する存在論的次元の層とその基底を成す現象学的次元の層の層状化を企図しているものと言える。

(2)『イデーンＩ』(１９１３年時点)における形相的心理学の位置づけ

１９１１年時点で構想された現象学による諸科学の基礎づけは、１９１３年公刊の『イデーンＩ』において諸科学の現象学として体系化されることになる。フッサールは、『イデーンＩ』において次のように述べている。「例えば、物理的自然は遮断されるが、他方で、それにもかかわらず、自然科学的意識の現象学が存在するだけでなく、自然科学的意識の相関者としての自然そのものの現象学もまた存在する。同様に、心理学や精神科学は遮断されるとしても、人間の現象学、人間の人格性の現象学、人間の人格的特性の現象学、人間の（人

間的）意識経過の現象学が存在する。さらに、社会的精神の現象学、社会的諸形態の現象学、文化形成体の現象学、等々が存在する」(3)。ここで述べられているように、存在論的次元に自然科学や心理学や精神科学等々が存立するとしても、それらの諸科学の基底を成すような自然科学的経験や心理学的経験や精神科学的経験についての現象学が存在するはずである。そして、存在論的次元に成立するこうした現象学こそ、形相的心理学と呼ばれるべきものである。

フッサールは、『イデーンⅠ』において、形相的心理学の学問論的位置づけに関して次のように述べている。「意識は、心理学的経験の所与として、それゆえ人間的ないし動物的意識として心理学の客観であり、経験科学的研究において経験的心理学の客観であり、本質学的研究において形相的心理学［eidetische Psychologie］の客観である、ということを我々は確定する。他方で、現象学における括弧入れという変様［die Modifikation der Einklammerung］のうちには、全世界が心理的諸個人およびその心理的諸体験とともに属する。一切のものは、絶対的意識の相関者としてある。それゆえ、そこでは、意識は、さまざまな統握の仕方と連関において現れるのであり、現象学そのものの内部でさまざまな統握の仕方と連関において現れるのである。つまり、現象学そのものにおいて、一方で絶対的意識として現れるのであり、他方で相関者において心理学的意識として現れるのである。心理学的意識は、自然的世界に組み込まれるが、或る種の仕方で価値転換され、けれども意識としての固有の内実は失われない。これは、困難な連関であるとともに、きわめて重要な連関である。そうした連関においては、絶対的意識に関するあらゆる現象学的確定は形相的心理学的確定（それは厳密な考量においてはそれ自体断じて現象学的確定ではない）へ解釈し直されうる、ということが存する。しかし、その際に、現象学的な考察の仕方は、包括的な考察の仕方であり、絶対的な考察の仕方としてラディカルな考察の仕方である。こうした事の一切を洞察すること、そして、さらに純粋現象学、形相的心理学と経験的心理学、あるいは精神科学の間の本質的関係を完全に透視するような明瞭さへもたらすことは、ここで関与する諸学問にとってそして哲学にとって一つの大きな要件である」(4)。ここで、人間的ないし動物的意識を研究対象とする経験科学としての経験的心理学に対して、人間的ないし動物的意識を研究対象とする本質学としての

形相的心理学が、対置されている。そして、経験的心理学および形相的心理学の研究対象である心理学的意識は、自然的世界に組み込まれるような存在論的次元のものであるのに対して、その基底としての現象学的次元で心理学的意識を相関者として構成する超越論的意識が、絶対的意識として対置されている。しかも、絶対的意識としての超越論的意識に関する現象学的確定と心理学的意識に関する形相的心理学的確定とは、相互に解釈し直されうるつまり価値転換されうる、と説かれている。そうすると、１９１３年の『イデーンⅠ』の時点で、形相的心理学は、学問論的に見て、自然的態度の存在論的次元に経験的心理学とは峻別されて位置づけられるとともに、存在論的次元の基底を成す現象学的次元の純粋現象学（超越論的現象学）と並行するものとして位置づけられることになる。さらに、純粋現象学（超越論的現象学）、形相的心理学、経験的心理学、精神科学の間の本質的関係を明瞭にするという課題が、掲げられている。こうした課題は、どこで解決されるのか。

それに関して、フッサールは、『イデーンⅠ』の中で次のように述べている。「現象学（ないし、ここでは暫定的に現象学からまだ区別されておらず、ともかく現象学と緊密に結び付けられる形相的心理学）と経験的心理学の間のここで軽く触れられた関係もまた、それに属する一切の深い諸問題とともに『イデーンⅡ』において解明へもたらされるはずである。現象学（ないし形相的心理学）は、経験的心理学に対して、事象に即した数学的諸学問（例えば幾何学や運動学）が物理学を基礎づけるのと同じ意味で、方法論的に基礎づける学問であるということを、私は確信している」(5)。したがって、超越論的現象学、形相的心理学、経験的心理学、精神科学の間の本質的関係を明瞭にするという課題は、『イデーンⅡ』において解決されるはずである。

(3)『イデーンⅡ』(１９１２年～１９１５年執筆)における形相的心理学の遂行

フッサールは、１９１２年から１９１５年へかけて執筆された『イデーンⅡ』において次のように述べている。「我々が自然主義的態度［naturalistische Einstellung］で生きるかぎりで、自然主義的態度そのものは我々の研究領野のうちに与えられないし、そこでは自然主義的態度で経験さ

れるもの、思惟されるもの等々も捉えられない。しかし、我々が現象学的反省および還元を遂行し、態度そのものを主題化し、現象学的反省および還元において研究されるものを態度に関係づけるとき、我々は、形相的還元［eidetische Reduktion］を遂行し、あらゆる超越化する統覚の純化［die Reinigung von allen transzendierenden Apperzeptionen］を遂行する。つまり、あらゆる我々の研究は、純粋現象学的研究へ変わる。その場合、我々は、自然主義的態度の主観として純粋自我をもつ。確かに我々は反省においてさしあたり経験的自我として見いだされるのだが、我々はさしあたり自然主義的態度をまさに或る新たな自然主義的態度として遂行するのであり、それゆえその新たな自然主義的態度は現象学的還元の際に括弧の中に属する。究極の主観つまり現象学的主観は、いかなる遮断にも屈せずそれ自体あらゆる形相的現象学的研究の主観なのだが、それは純粋自我［das reine Ich］である」(6)。ここで言われている自然主義的態度とは、物理学者が物理学を行う場合のような自然科学的態度のことであり、学問的態度のことである。そして、そうした態度に形相的還元を施すと、自然科学的に見られた自然界を研究対象として超越化する自然科学者の自然科学的経験的統覚は括弧の中に入れられて現象学的現象となり、括弧の中に入れられて遮断された自然科学的経験の形相的本質を括弧の外側から現象学者が観取するというわけである。これは、形相的現象学つまり形相的心理学に他ならない。

先の引用箇所に続けて、さらに、フッサールは、次のように述べている。「この場合、《遮断されたもの》は、いつもどおりに括弧変様［Klammermodifikation］の中に含まれており、それゆえ、自然主義的態度の世界全体であり、最広義での《自然［Natur］》である。この場合、我々が知っているように、この自然——この場合、自然的態度［die natürliche Einstellung］を成す作用の純粋意味としての自然、自然的態度を成す作用の構成的相関者としての自然——の本質には、次のような事が属する。つまり、或る承認された根本措定が、通常自然と呼ばれる一切のものがそのうちに基礎づけられたものとして自己の意味を得るような第一義での自然つまり物理的自然［physische Natur］の措定として遂行されるということである。それゆえ、統握の構成する根本様式に関して、基礎的統握としての物理的経験［die physische Erfahrung］、それに支えら

れそれを共に包括する身体経験［die Leibeserfahrung］、人間や動物を構成する経験［die Mensch und Tier konstituierende Erfahrung］が、重なり合って構築された。人間や動物を構成する経験には、構成的な層として心理的経験［die Seelenerfahrung］が属する」(7)。ここで、自然科学的態度としての自然主義的態度および日常生活態度としての自然的態度の相関者たる最広義の自然は、物理的経験・身体経験・心理的経験という層状化した諸経験の構成体であることが、説かれている。それらの諸経験は、存在論的次元に成立する実在的な現実経験であり、形相的心理学の分析対象とされるべきものである。

フッサールは、また、別の箇所で次のように述べている。「或る意味でかなり自然的［natürlich］であるが自然に即して［natural］ではないような新たな態度を、我々はもくろんでいる。《自然に即してではない［nicht natural］》とは、そこで経験されるものがあらゆる自然科学の意味での自然ではなく、いわば自然の反対［ein Widerspiel der Natur］であるということを意味する。対立を把握するのみならず内側から理解するという全く著しい困難は、態度の遂行のうちに自明的に存するわけではない。なぜなら、我々は、もちろん人為的態度［die künstliche Einstellung］によって純粋意識を、つまりさまざまな還元のこうした残余［Residuum］を射程に入れるからであり、我々は、絶えず全く難なく或る態度から別の態度へ、自然主義的［naturalistisch］態度から人格主義的［personalistisch］態度へ、関連する学問においては自然科学的態度から精神科学的態度へスライドする」(8)。ここで、自然に即しての自然科学的態度が、自然主義的態度と呼ばれ、自然に即してではない精神科学的態度が、人格主義的態度と呼ばれている。自然科学的態度に基づく自然科学的経験も、精神科学的態度に基づく精神科学的経験も、形相的心理学の分析対象となることが、ここに明言されている。したがって、１９１２年から１９１５年へかけて執筆された『イデーンII』の時点で、自然科学的経験や精神科学的経験や心理学的経験といった実在的な現実経験を存在論的次元で分析する現象学としての形相的心理学が、体系的に遂行されたものと言える。

(4) １９１７年時点における心理学と現象学の区別および関係

フッサールは、１９１７年２月から４月までに「現象学と心理学」という論文と「現象学と認識論」という論文を一気に書き下ろした(9)。それは、フッサールの現象学に対して向けられた批判的な諸々の異議に対する回答であり、フッサールによって計画されたが出版には至らなかった学術雑誌『カント研究［Kant-Studien］』の別冊のための草稿である(10)。その背景には、次のような経緯がある。つまり、１９１７年初めに、学術雑誌『カント研究』編集長マックス・フリシャイゼン・ケーラーは、現象学および現象学の心理学や認識論に対する関係についてのテオドール・エルゼンハンスとパウル・フェルディナント・リンケとの間の討論をめぐって雑誌で自己の立場を明らかにするようにフッサールに依頼し、フッサールはそれに同意していたということである(11)。

フッサールは、１９１７年の論文「現象学と認識論」において、心理的経験および心理学的経験について次のように述べている。「私つまり空間内のここに居る人間は、私に対して自然の他の諸事物の下にこの樹木をももつのであり、しかも、私は、私の心的状態性である私の《外的知覚》によってこの樹木に関係づけられる。こうした知覚について、私は、根源的に或る新たな意識状態によって知るのであり、つまり、《自己経験［Selbsterfahrung］》ないし局限して心的なものに制限すれば《心理的経験［psychische Erfahrung］》という題目に分類されるような、こうした知覚を捉える《内的》知覚によって知るのである。心理的経験は、そのうちでもっぱら心理的なものに対する理論的関心が支配する場合、心理学的経験［psychologische Erfahrung］と呼ばれる。あらゆる種類の意識体験についてもそうである。心理学的経験（自然に即した［natural］統覚としての）においてあらゆる意識は把握され、それとともに或る動物的存在者の心理的状態として、あるいは厳密に言えば、実在的身体物体性と結び付けられた心的主観の心理的状態として経験される」(12)。ここで、日常生活を営む通常の人間が自己の意識を反省的に自覚する経験を心理的経験と呼び、心理学者が自己の意識を反省的に理論化する経験を心理学的経験と呼んでいる。そうすると、心理学と現象学の区別および関係は、どうなるのか。

それに関して、フッサールは、１９１７年の論文「現象学と心理学」におい

て、心理学と現象学を区別して次のように述べている。「心理学的経験の現象学および心理学的真理を構成する思惟の現象学は、他の主題と同様に一つの主題である。他方で、意識と意識されるものについての本質確定としてのあらゆる現象学的確定は心理学的確定へ価値転換しうるということは、明らかである。心理学的意識は、純粋意識ではなく、心理的なものを物理的身体において自然に即して現れるものとして、世界に空間時間的 - 因果的に属するものとして統握する自然的統覚における意識である。しかし、この統握は、意識生自体の本質成素を変様することなく、意識内容そのものを伴うそのつどの意識生を核として保持している。心理学者が空想について語る場合、空想は、内的に経験される体験に対する題目である。現象学者は、こうした体験を心理学化する［psychologisieren］ことなく、それゆえ自然現実性［Naturwirklichkeiten］として客観化することなく、こうした体験を純粋にそれ自体固有の類型的本質から見て把握する。……あらゆる体験は、現象学的態度において内在的に純粋現象として統握されるし、また、付加される心理学的態度において超越的に心理物理的自然現象として統握される。それゆえ、純粋現象学のあらゆる体験は、アプリオリな心理学ないし合理的心理学の成果へ解釈し直されうる」(13)。ここで、心理学的経験や心理学的思惟は現象学の対象となりうること、つまり、心理学的確定は現象学的確定へ価値転換しうることが説かれるとともに、逆に、現象学的確定は心理学的確定へ価値転換しうることも説かれている。そして、心理学が、世界に空間時間的 - 因果的に属する実在的な自然現実性を客観化し、超越的に心理物理的現象として統握される体験を分析するのに対して、現象学は、体験を内在的に純粋現象として統握し、その本質を把握することが、説かれている。さらに、現象学的確定はアプリオリな心理学的確定ないし合理的心理学的確定へ価値転換しうることが、説かれている。ここで言われているアプリオリな心理学ないし合理的心理学は、明らかに形相的心理学のことである。そうすると、心理学と言えば一般的には経験的心理学を指すが、経験的心理学と形相的心理学と現象学の関係は、どうなるのか。

それに関して、フッサールは、「現象学と心理学」において次のように述べている。「現象学と合理的心理学（心理的なものの本質学）を非常に親密であるというそれらの諸連関にもかかわらず同一視することは、根本的に誤りであ

るということであり、上述されたように、あらゆる現象学的認識は、対応するいつでも可能な解釈し直しによって合理的心理学的認識へ変わりうるし、それから経験的心理学的認識へ変わりうるということである」(14)。ここで、現象学から合理的心理学つまり形相的心理学への価値転換の可能性、そして、形相的心理学から経験的心理学への価値転換の可能性について、説かれている。そうすると、実在的次元に成立する経験的心理学、その本質学としての形相的心理学、それら両者の基底としての超越論的次元に成立する現象学という三層構造が、ここに確立されることとなる。

(5) １９１７年時点における形相的心理学と超越論的現象学

フッサールは、１９１７年の論文「現象学と認識論」において、経験的心理学と形相的心理学について次のように述べている。「経験的心理学［die empirische Psychologie］は、一般的な経験的自然科学の分肢として、自然という所与の基盤の上での研究あるいは所与の（顕在的な）自然に即しての［natural］経験における絶えざる遂行の枠内での研究であった。形相的心理学［die eidetische Psychologie］は、形相的自然科学一般と同様に、理念的に可能な自然一般という絶えず与えられる基盤の上での研究であり、また同じ事だが、可能的経験一般つまりまさに可能的自然一般を与える可能的経験一般の絶えざる遂行における研究である」(15)。ここで、経験的心理学は、経験的自然科学の一部門であり、自然に即しての経験つまり所与の顕在的な実在的自然に対する現実的経験に基づく学問である、ということが説かれている。それに対して、形相的心理学は、数学のような形相的学問の一部門であり、可能的自然を与える可能的経験つまり所与の自然を変様した潜在的な理念的自然に対する可能的経験に基づく学問である、ということが説かれている。そうすると、経験的心理学と形相的心理学は、方法論的にどのような関係にあるのか。

フッサールは、経験的心理学と形相的心理学の方法論的関係について、次のように述べている。「形相的心理学にとって、可能的経験一般の妥当性、つまり、超越的現実定立一般の妥当性は、いかなる問題でもありえない。なぜなら、可能的経験一般の妥当性は、形相的心理学において絶えざる《前提》だからで

ある。自然科学およびとりわけ経験的心理学は、現実的経験の基盤の上に立てられ、形相的心理学は、可能的経験の基盤の上に立てられる。形相的心理学は、自己の範例的空想に基づいて自然形成一般の純粋可能性を、もっと詳しく言えば、心理学的形成の純粋可能性を捉え、形相的に普遍的な定立においてこの一般的可能性を措定しこの一般的可能性にその基盤を与えるような普遍性意識（形相的普遍性を構成する意識）を常に遂行する」(16)。ここで、現実的経験の基盤の上に立てられる経験的心理学に対して、形相的心理学は、自己の範例的空想に基づく可能的経験の基盤の上に立てられる、ということが説かれている。つまり、形相的心理学が捉える自然形成一般の純粋可能性ないし心理学的形成の純粋可能性は、形相的心理学の範例的空想に基づくのであり、形相的心理学は、形相的普遍性を構成する意識を遂行するのである。それでは、形相的心理学の方法論は、具体的にどのようなものであろうか。また、それに対して、超越論的現象学の方法論は、具体的にどのようなものであろうか。

それに関して、フッサールは、「現象学と認識論」において、空想における反省について次のように述べている。「空想は、諸可能性を原的に［originär］もたらす。反省（場合によっては、自然に即しての空想［naturale Phantasie］としての）が純粋反省である場合、空想における反省［die Reflexion in der Phantasie］は、空想者として意識へ向けられるようなあらゆる意識一般であり、それゆえ、諸意識可能性を原的にもたらし、あらゆる懐疑可能性の外部で諸意識可能性を絶対的に与える。言い換えれば、空想の無限の領域においても我々は現象学的還元を行使しうるのであり、しかも空想作用の純粋顕在性［reine Aktualität des Phantasierens］をきわだたせることに関してだけでなく、諸空想における諸反省［die Reflexionen in der Phantasien］に関しても現象学的還元を行使しうるのである。そして、それによって、超越論的に純化された諸可能性の範囲としての絶対的に与えられる《可能的》意識の範囲という無限の領域全体を覆って、我々の絶対的所与性の領野が拡張される」(17)。ここで、自然に即しての空想における反省が形相的心理学における反省であり、それに対して、純粋反省が超越論的現象学における反省である。また、空想作用が純粋顕在性をもつような反省が形相的心理学における反省であり、それに対して、諸空想における諸反省という性格をもつよ

うな反省が超越論的現象学における反省である。自然に即しての空想における反省とは、所与の顕在的な実在的自然に対する現実的経験を範例として空想の中に包み込んでその普遍的な形相的本質を観取するような反省である。こうした形相的心理学における反省は、形相的心理学者が実在的現実の次元を踏まえている点で分析対象としての範例的経験のみが空想の中に包み込まれて中立化され、その空想作用は実在性にさらされて顕在性をもたざるをえない。それに対して、実在的現実の次元を脱却した純粋反省としての超越論的現象学における反省は、範例的経験のみならずその空想作用をも空想の中に包み込んで潜在化し、実在性を遮断して中立性を保持した諸空想における諸反省を可能にする。つまり、形相的心理学は、実在的現実の次元において範例的経験としての現実的経験の形相的本質を把握するのに対して、超越論的現象学は、範例的経験としての現実的経験を超越論的に純化して可能的経験へ転換するのである。そうすると、形相的心理学の領域と超越論的現象学の領域は、それぞれどのようなものになるのか。

フッサールは、「現象学と認識論」において、形相的心理学の領域と超越論的現象学の領域について次のように述べている。「私つまり顕在的主観、しかし純粋な主観は、空想《において［in］》純粋な反省を遂行するのであり、それゆえ、私は、空想における純粋な反省において現象学的還元を遂行するのであり、私は、純粋な擬似的意識作用への純粋な反省の遂行によって、この純粋な擬似的意識作用において同時に絶対的所与性つまり具体的で独特の諸意識可能性を把握する。……我々は、あらゆる知覚的反省において、あらゆる想起的反省およびそのほかあらゆる準現在化的反省においてだけでなく、一切のそのような諸反省の空想変様ないしあらゆる空想一般においても現象学的還元を遂行する。それに応じて、我々は、二つの純粋意識の領域をもつ。つまり、意識現実性の領域と意識可能性の領域であり、表現の曖昧さという弊害をより一層少なくして言えば、（現象学的知覚、現象学的想起およびそのほかの定立的直観によって与えられる）現実的であるような純粋な自我体験の領界と純粋な自我体験の諸可能性の領界である」(18)。ここで述べられているように、形相的心理学も超越論的現象学も、空想における純粋な反省において現象学的還元を遂行するのであるが、形相的心理学は、実在的現実を踏まえた準現在化的反省

によって形相的現象学的還元を遂行するのであり、超越論的現象学は、実在的現実を遮断した諸反省の空想変様によって超越論的現象学的還元を遂行するのである。その結果、形相的心理学の領域は、意識現実性の領域つまり現実的であるような純粋な自我体験の領界ということになり、超越論的現象学の領域は、意識可能性の領域つまり純粋な自我体験の諸可能性の領界ということになる。

結語

本論は、１９１１年時点から１９１７年時点までのフッサールの形相的心理学の展開に関して、次のような事を明らかにした。つまり、第一に、１９１１年時点のフッサールは、自然科学や精神科学等々の諸科学を現象学によって基礎づけるという構想を抱き、諸科学の存立する存在論的次元の層とその基底を成す現象学的次元の層の層状化を企図している、ということである。第二に、１９１３年の『イデーンⅠ』の時点で、形相的心理学は、学問論的に見て、自然的態度の存在論的次元に経験的心理学とは峻別されて位置づけられるとともに、存在論的次元の基底を成す現象学的次元の純粋現象学（超越論的現象学）と並行するものとして位置づけられることになる、ということである。第三に、１９１２年から１９１５年へかけて執筆された『イデーンⅡ』の時点で、自然科学的経験や精神科学的経験や心理学的経験といった実在的な現実経験を存在論的次元で分析する現象学としての形相的心理学が、体系的に遂行されたものと言える、ということである。第四に、１９１７年時点で、実在的次元に成立する経験的心理学、その本質学としての形相的心理学、それら両者の基底としての超越論的次元に成立する現象学という三層構造が確立される、ということである。第五に、１９１７年時点で、形相的心理学の領域は、意識現実性の領域つまり現実的であるような純粋な自我体験の領界ということになり、超越論的現象学の領域は、意識可能性の領域つまり純粋な自我体験の諸可能性の領界ということになる、ということである。

注

(1) Husserliana, Dokumente Bd.Ⅲ,Briefwechsel,Teil 6,Philosophenbriefe, In Verbindung mit E.Schuhmann hrg. v. K.Schuhmann,1994,S.50.
(2) Ibid.,S.50.
(3)Husserl,E.,Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch.hrg.v. K.Schuhmann,Husserliana,Bd.Ⅲ/1,1976, S.159.
(4) Ibid.,S.160f..
(5) Ibid.,S.178.
(6)Husserl,E.Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch.hrg.v. M.Biemel,Husserliana,Bd.Ⅳ,1952,S.174.
(7) Ibid.,S.174.
(8) Ibid.,S.180.
(9) Vgl.Husserl,E.Aufsätze und Vorträge (1911-1921).hrg.v.T.Nenon u.H.R.Sepp, Husserliana.Bd.XXV,1987,S.XIX.
(10) Vgl.ibid.,S.XⅦ.
(11) Vgl.ibid.,S.XⅧ.
(12) Ibid.,S.151.
(13) Ibid.,S.117.
(14) Ibid.,S.119.
(15) Ibid.,S.156.
(16) Ibid.,S.159.
(17) Ibid.,S.170.
(18) Ibid.,S.171f..

(ほり・えいぞう　大分工業高等専門学校一般科文系教授)